

氏名（本籍）	范丹（中国）			
学位の種類	博士（国際政治経済学）			
学位記番号	博 甲 第 6703 号			
学位授与年月日	平成 25 年 9 月 30 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	中国内陸地域における三農問題と多就業農家経営の展開 ——四川省樂山市での現地調査を通じて——			
主査	筑波大学教授	博士（経済学）	田 中 洋 子	
副査	筑波大学教授	博士（経済学）	平 沢 照 雄	
副査	筑波大学教授	博士（法学）	首 藤 もと子	
副査	筑波大学教授	博士（農学）	納 口 るり子	

論 文 の 要 旨

本論文は、中国四川省における個々の農家世帯単位における農業生産と就業問題を明らかにすることにより、中国内陸地域における三農問題を小規模農家経営の展開から総合的に解明しようとする研究である。

三農問題とは、農業、農村、農民という三つの「農」に関わる問題を指す。それは、人口が多くて土地が狭いため、世帯当たり土地面積が小さく、農業労働生産性が低下する農業問題、都市を支えるために長期間軽視され、出稼ぎ労働者の流出によって過疎化が進む農村問題、低所得の農民と都市住民との格差拡大という農民問題の三つである。

従来の研究では、農業生産の規模をめぐる問題が大きく議論され、農業の経営規模の拡大、機械化と労働節約型を指向するアグリビジネス企業による農業生産問題の解決が主流の考え方であった。また、農民は村を離れて出稼ぎ労働に出ることで所得向上がもたらされる、とする議論が展開されてきた。しかし、本論文は、これらの議論では、農村や農民が都市や工業化の視点からのみ捉えられ、農家世帯の実態を見る視点が欠落していた、と問題提起する。国家統計のデータ項目の不充分さや基準の不統一により、世帯内の農民行動の現実の多様性が見えづらくなっているという大きな限界も存在するとしている。

そこで本論文は、これまでの研究で軽視されてきた農家の世帯にあらためて着目する。個々の農家世帯において、いかに自家の農業生産と労働力配分が行われているかを、農家世帯員の具体的な行動を通じて考察しようとする。農家世帯レベルで、誰が何をどのように作っているのかという農業生産の実態の解明を、また労働力配分については、誰が出稼ぎに行き、また行かなかったのか、その理由はなぜか、地元に残った人々は何に従事しているのか、という農家世帯内の就業実態の解明を試みる。その中でも特に、農業を兼ねて多様な就労形態で働いている農家の存在に注目し、農業で働きながら同時に通勤労働、自営労働、地元農業賃労働、出稼ぎ労働など多様に就労している農家を多就業農家と定義し、その実態の分析を行っている。

論文全体の構成としては、序章で問題意識と研究課題を述べ、第一章で先行研究の限界について論じた後、第二章で三農問題をめぐる歴史的な政策の変遷を跡づける。第三章において小規模多就業農家の展開についての先行研究と調査結果の概観を行い、それを受けて第四章では、農業生産の農家類型別の特徴と、そこで行われている請負パート制度について考察している。第五章では農村工業化と地元就業者としての通勤兼業労働者

について調査結果の分析を行い、終章で結論と今後の展望を述べている。

本論文では、研究課題を検証するために、農業生産が盛んで、農村労働力移動も顕著である内陸地域に位置する四川省において、農家に対する総合的な現地調査を長期に行っている。2006年から2013年にかけて、四川省樂山市の9つの農村地域、前後18回にわたった調査を実施し、そこから得られた246戸、819人の農家資料データ（聞き取り調査、アンケート調査、資料収集）と鎮・村の個人資料(档案)を中心に使用している。

調査結果の分析からは、これまで多くの研究や政策が想定していた農業の大規模化や都市部への出稼ぎ労働の拡大というよりも、むしろ、多様で重層的な就労形態をとりながら地元で働く、多就業農家の存在が大きいことが明らかになった。

調査対象農家全体の分析からは、農業生産の担い手は、地域内で10%を占める専業農家と81%を占める多就業農家によって担われていることが確認された。専業農家、多就業農家のいずれも、自給的な生産と商品作物生産の双方が存在していることも明らかになった。先行研究や中央政府の政策の中で、農業の担い手として想定されていたアグリビジネス企業による農業産業化や、出稼ぎでの都市への完全な労働力移動は、主要とは言えないことが分かった。

さらに、両種類の農家のいずれにおいても、農繁期に雇用労働に対する需要が生じており、調査の結果、多就業農家の構成員から農業の雇用労働が請負パート労働として提供されているということが明らかになった。特に商品作物生産において、多就業農家の労働力が雇用労働者として提供されたことにより、一方では農繁期の人手不足の解消と農業収入の向上、他方では多就業農家の世帯所得の上昇をもたらし、それぞれの農家の所得向上に寄与し、同時に農業の発展をもたらす面を持ったとされる。

農家の就業形態についての調査からは、これらの研究でほとんど無視されてきた、農村工業や農村部の第3次産業への農民の通勤の実態が明らかにされている。自宅から働きに行く通勤労働者の大半は、「離土」（農村を離れること）せず、「農業+ α （農外産業）」という働き方をしていること、農家が自らの意思で仕事の自由度や家族との暮らしを願い、自ら農業と農外産業に同時に従事することを選択したことが明らかにされた。農家の8割を占める多就業農家世帯は、農業生産部門から自給分の農産物を得、商品作物からの現金収入を得ると同時に、賃金労働からも現金収入を得るという複数の収入源を持っていることが判明した。

この結果を受けて本論文では、農村で多くを占めている多就業農家について、三農問題との関係で以下のように結論づける。まず、大規模農業にならなくとも、農家は多就業という重層的な就業形態を通じて、その収入を多様に増やし、農家世帯所得の安定化、農村部の発展を促す基盤となりえている、という点である。また、都市部に出稼ぎに行く以外に、農民が農村部で自分の土地を離れずに農村工業やサービス業、自営業、請負パート労働など、多様な形で地元の労働力になりえている、という点である。これにより、都市部の工業労働力にならなくとも、農村部での就業から所得を得られ、農村内で必要な労働力を供給しあう形で農村や農家が発展する可能性が与えられているとされる。これらの条件のもと、多就業農家こそ、農村の中で農業を支え、農家の所得をあげる可能性を示唆していると結んでいる。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文の重要な独自性は、中国が直面する三農問題に対して、これまで多くの研究や中央政府が注目してきた、農業の大規模化や都市部への出稼ぎ労働の推進とは全く異なる側面からアプローチしている点にある。

これらの研究の多くがマクロな国家統計に依拠し、農民の具体的行動を的確に捉えきれない限界をもっているのに対して、本論文は、一つ一つの農家世帯、世帯の中でさまざまな仕事に従事する一人一人の農民の行動

に分析視点を置き、長期間にわたって農村地域での現場調査を行い、多くの農民への聞き取りを進めてきた。こうした研究方法を通じて、従来の統計分析からだけでは見えてこなかった中国農村の実像に迫り、その農村像の修正を迫った点こそ、本論文が研究史に持つ最大の貢献とすることができる。

本論文はさらに、これまで中国農村についての研究史では全く注目されてこなかった、独自の発見と分析を行っている点で高く評価できる。一つは「多就業農家」であり、本論文は世帯内の農民行動を現地調査から分析する中で、これまでの研究史が見過ごしてきた農家世帯の働き方の多様性を発見し、中国農村研究において初めて、これを多就業農家という概念を使って説明した。もう一つは「請負パート」である。農繁期に雇用労働を融通する「包工隊」の仕組みや給与制度について詳細な分析を行い、それを農業生産や多就業農家と関連させて論じた点も、本論文オリジナルである。また、「通勤兼業労働者」について、地元の石炭工場やバイクタクシーなどについて詳しく実態を明らかにした点も独自の点と言えよう。

このように本論文は、徹底した現場調査を通じて、農村・農家・農民の視点から中国の三農問題の解明を行うことで、これまでの研究からは見えなかった中国内陸地域の農家世帯の実態に迫るものである。本論文は論理構成も一貫して明確なものとなっており、博士論文として十分な内容であると判断される。

2 最終試験

平成25年7月12日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際政治経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。